
潰し魔

ハシルケンシロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

潰し魔

【Nコード】

N1933B

【作者名】

ハシルケンシロウ

【あらすじ】

見る影もなく顔を潰された女の死体が発見された。二人の刑事が捜査に乗り出すが、まだこの被害者の身元も割れないうちに、次なる被害者が出てしまう。

起（前書き）

かなりグロいです（TOT）

苦手な方は、この段階でスルーしてください

m (| |) m

俺の人格が疑われてしまうのではないかと心配なぐらい、【グロい
です】 (^ | ^ ;)

起

「狂ってる……」

現場に到着しての第一声はこれだった。

『商店街の路地裏に若い女性の変死体発見』
との出勤要請が入り、パトカーで急行した結果見た物が、これである。

確かにそれは、女だった。

見た目一発で『女』と断言できる体格。
間違い無いようだ。

だが、顔が判らない。

本来なら、顔があるべき場所にある物。

それはもはや、顔と呼ぶことが出来ない代物だった。

死体の顔。

そこには、生前の面影は一切無い。

どのような容姿だったのか、どうにも想像がつかないほどに、惨めに潰されていた。

「女の子なのに……。
こんなの酷いです！」

なんも出来ない女の子をこんなになるまで素手で殴り続けるなんて
！！」

ボコボコだの、ボロボロだのといったレベルではなく、ぐちゃぐちゃだった。

皮膚は裂けて捲れ上がり、そこから脂肪分や、何やらドロドロした半固形状の体液と一緒にたになって、潰れて千切れた肉がはみ出している。

歯は、全てへし折れ、飛び出した眼球が、頬の上でむごたらしくひしゃげていた。

「あのお、あたしこれ、女の人だと思うんですよ」

声をかけてきたのは鑑識官の羽沢夏世だ。

伝説の鑑識からいろはを学び、それを遺憾無く自分の知識として吸収している。

「あのね、夏世ちゃん。

そんなこたあ見りゃ判るのよ。

こんな立派なおっぱいしてる男なんて、居る訳無いでしょ？」

こう受け答えたのは先輩刑事の加藤早百合だ。

この二人、あまり仲が良くない。

先輩曰く、

「皐月の友達はみんな嫌い！」

ということらしい。

皐月というのは、先輩と同期の女刑事で、総ての言動が芝居がかって見える、なにを考えているのかさっぱり得体の知れない女だ。

正式名称を岩国皐月という。

階級は【警部】だ。

先輩の階級がまだ【警部補】であるため、それが二人の関係に油を

注いでいる。

そのとばつちりで、夏世にも先輩の、皐月に対する嫌悪感が延焼してしまっているのだ。

「そんなの、あたしだって見て判りましたあ！

あたしが言ってるのはあ、犯人のことなんですう！」

《伝説二世の御手並み、拝見させてもらいますか》

あたしは、傍観を決め込んだ。

「いいですかあ、被害者のお腹、濡れてるのは解りますねえ？」

確かに、濡れている。

着衣に広がった染みの範囲を見る限り、かなりの量の液体を浴びたものと思われる。

「わたしもそれは気になってたのよ。

でも、それがなんだって言うの？」

「加藤さんはこれ、なんだと思いますかあ？」

先輩はどう答えるのだろう。

あたしなりの答えはもう出ていた。

「何って……、知秋ちゃんはどう思う？」

知秋とは、あたしの名前だ。

正式名称は荒居知秋あらいちあきという。

入庁したてのまだまだ至らないヒョッコ刑事だ。

「あたしは……、まだまだ考え中です。
先輩からどうぞ」

取り敢えず先輩の顔を立てておく。

「あたしは……、犯人のおしっこが精液だと思ってたんだけど」

あたしの考えは、そのどちらでもなかった。

「ええ、確かにセイエキではあるでしょうねえ。

でも米論に青じゃなくて、立心論に生なんですう。

被害者のお腹、濡れてるとこの臭い、かいでみてくださあい」

いちいち間延びするのは鬱陶しいのだが、やる気になった夏世はここごとく語尾が間延びするのだから仕方がない。

一度鬱陶しいと文句を言ったら大泣きされたことがある。

どうにも出来ないのも、もう間延び矯正は、諦めてしまった。

「かげって言われても……、もうこの辺から充分におしっこ臭いしねえ。

あまり臭いは参考にならないと思うんだけど」

確かに、臭かった。

余程恐ろしかったのだろう、被害者はこれが本当に人間の、しかも、女がする量なのかと疑ってしまっただけ、大量に失禁してしまっていたのだ。

そして、被害者の体内から放たれた尿は、その不快臭をなんの情けも容赦も恥じらいもなく、辺り一帯に遺憾無く撒き散らしていた。

文句を言いながらも、先輩は臭いをかぎに行く。

「あーったく、くっさいわねー……」

そして、失禁跡を踏まないように気を付けながら、遺体の腹部に顔を寄せた。

《！！》

あたしは、先輩の表情が険しくなったのを見逃さなかった。

いったい何があったのだろうか。

先輩は、眉間に深い皺を寄せ、狂ったように鼻をひくひくと利かせている。

そして、おもむろにあたしに振り向き、告げた。

「知秋ちゃん、これ……、臭くない」

その答えは予測できていた。

間違い無く、染み自体は無臭なはずだ。

「そうなんですか!？」

芝居がかつていなかったか心配だったが、先輩の手前わざと驚いて見せた。

あたしに出し抜かれて機嫌を損ねたことは、一度や二度ではない。

「そうなんですよお、臭くないんですう。

あたし、中肉中背の、平均的な日本成人女性ですう。

ちよっと被害者をぶん殴りやすい位置に座ってみますねえ」

そう言つて夏世は、腕との位置関係を調整しながら、被害者に馬乗りになった。

「ほらあ。

この位置に来るんですう」

染みは、夏世の股間を中心に据えるような位置関係で広がっていた。

「これって、あれ……、女がこの女の子ぶん殴ってる最中に悦に入つて潮吹いちゃったってこと……？」

この問いに対して夏世はこう答える。

「あたしはあ……、そう思いますう……」

そしてそれは、あたしが出した答えでもあった。

初めから考えてはいたことだったが、実際に言葉として聞いてみると、更に現実味が増し、体が震え出した。

あたしは考える。

実際にこの状況になるには、被害者と犯人の間でなにが行われたかを。

まずは、犯人が被害者をここに連れ込む。

これはお互いに女なのだから、さほど難しいことでもないだろう。そして、次は、どうしたのだろうか。

……、一番有り得る可能性は、ここに連れ込むなり、殴り倒してしまふパターンだ。

だが、実際にこれを行うには、少しぐらいは警戒している相手をそれでも殴り倒すことが出来る圧倒的な素手戦闘能力が要求される。

また、そんなことが出来るのは、空手家か、ボクサーか、プロレスラーぐらいしかないと断定していいだろう。

どれも、女であるということを踏まえると、かなり絞り込むことが出来そうだ。

この手の快樂殺人というものは、暫く続く傾向があるという。なんとしても、この一件だけで終わらせたい。

「知秋ちゃん、この一件だけで……、終りにしようね!」

あたしはみんなの前で、そう誓いを立てた。

承（前書き）

ここが一番グロいです

（TOT）

ご注意ください、自分の出来るグロ描写の、ほぼ全てをつぎ込んで
います（＾ー＾；）

苦手な方は、是非スルーの方向で。

承

潰し魔は、相手を物色している。
勿論【殺害する】相手だ。

彼女には、卓越した身体能力と、魔法の手帳がある。

この二つのアイテムさえあれば、いくらでも楽しむことができるのだ。

《どうせなら、可愛い娘や綺麗な娘にしたいよねえ。

美しい物が、ジワジワと壊れていく……【カタルシス】って言うの？

うーん、感じちゃう》

通常では絶対に見せない【潰し魔テンション】に、徐々に入っていく。

《あたしより可愛い女や綺麗な女なんか、みんな死ねば良いの》

テンションが、急ピッチで上がっていく。

《あっ！

あの娘、可愛い〜。

あの娘と遊ぶことにしよう！》

とうとう潰し魔は、獲物を見つけてしまった……。

「ちょっといいかな？」

潰し魔が高校生ぐらいの女の子に声を掛けながら、悪魔の魔法を発動させる。

「あなた名前は？」

潰し魔は、魔法を発動させた後に、必ずこの質問をする。
そうすることによって、魔法の効き具合が確認出来るのだ。

「えっと、あのー……、矢沢蛭子です……」

オドオドしながら少女がそう名乗った。

潰し魔は確信を持つ。確実に魔法が効いていると。

潰し魔に魔法が効いていると判断されてしまうこと、それは、この矢沢蛭子という高校生が殺害されて死ぬということを意味している。

潰し魔はいろいろと適当な理由を付けて蛭子を人気の無い場所へと誘導していく。

そして、殺戮が始まる……。

「あの、お話って何でぶっ!!」

蛍子の言葉が終わらないうちに潰し魔の拳が左頬にヒットする。

「あああああ!!」

悲鳴をあげながら、47キロの体が宙に舞う。

女の子の柔肌を殴り付ける感触。
堪らなく気分がいい。

大きな音を発てて、蛍子が着地する。

「あつ、あつ……」

か細く鳴きながら蛍子が、口から血混じりの唾とともに、数本の奥歯を吐き出した。

「あつあつ……、あああああ!!!!」

女性特有の間高い裏声。

潰し魔お気に入り、この、悲鳴という鳴き声に、

「蛍子ちゃん可愛い！」

ねえねえ、もつと鳴いてよ。

ね？」

と、満足しつつも、まだ物足りない旨を告げる。

「奥歯、いっぱい抜けちゃったねえ。

アンバランスだから全部抜いちゃおうね」

言うなり、のたうち回る蛍子に馬乗りになった潰し魔は、彼女の大
きく開かれた口内に、力一杯に、右の拳を叩き込んだ。

「たっ、助けてください助けてくださいたぶお！」

必死に慈悲を求めている蛍子の全ての歯を、右の拳一つでへし折る。

おもむろに拳を抜いた後に残っていたもの、それは、ゴボゴボと血
の泡を吹き出す元の状態よりも若干広がってしまった、緋い色のみ
で構成されている蛍子の口だった。

「がつ、がつ、がぶげげ……、ぐばびび」

それはもはや、人間の言葉ではなかった。

右手に微かな痛みを感じていたが、己の加えた攻撃によって原型を
失った蛍子の口から放たれる、意味不明な声。

ほぼ間違いなく美少女の部類にカテゴライズされるであろう矢沢蛍
子。

それを叩き壊している実感。

潰し魔は、このえも知れないカタルシスに酔いしれ始める。

「あーん、もう、蛍子ちゃん可愛い。」

お口がクチャクチャになっちゃったのに、なんでこんなに可愛いのお？」

蛍子に対して、素朴な疑問を投げ掛ける。

当然返事が返ってくる筈もないのだが。

「あつ、そーかあ！」

おめめが可愛いんだ！

そのぱつちりクリクリで、キラキラなおめめが可愛いんだあー！！」

無邪気な満面の笑みを湛えながら、自分なりの結論をなかば強引に導き出した潰し魔は、

「えーい！」

と、楽しそうな掛け声を発して、右の拳を蛍子の左の目元に叩き込むために振りかぶる。

そして、

「それえ！」

との掛け声と共に、それは狙ったポイントに叩き込まれる。

「げぼあ！」

蛍子が奇声を発するのと、彼女の眼球が、すぐ側に大きな衝撃を受けたために、外に飛び出したのはほぼ同時のことだった。

「わあ、目ん玉出ちゃった。
キモーい。」

ねえねえ、目ん玉つて、出ちゃうと痛いの？
ねえ、出ちゃっても見えるの？

あとお、げばあってなあに？」

それらは全て、潰し魔には経験したことのない、素朴な疑問である。
悦んでいる子どものような間高い声で、もはや答えの返ってくるこ
とが無いことは歴然としている蛭子に対して、質問責めを浴びせる。

案の定、返ってくる声は、

「がぼっ、ごぼ、ごふっ、げふげふっ！！」

という、喉に流れ込む口からの出血にむせ返る音のみだった。

「一個だけ出てるのは不公平だから、二個とも出しちゃおうね」

ケラケラと笑いながら、潰し魔は攻撃を加えるために態勢を整える。

「えいつ！」

右の眼球も飛び出してしまふ。

「がががぼあがつ！

げふげふっ！

ごはあ！」

激しく痙攣しながらむせ返る蛭子の震えとうごめきに刺激された潰
し魔の股間が、遂に、濡れてしまった。

それと同時に蛭子の股間も濡れ始めていく。

二人の下半身を濡らす体液。

それは、全く違う種類の汁だったが、二人の下半身の見た目の状態は全く同じになってしまった。

そして、二人の汁は、蛭子の腰の辺りで一緒くたに混じり合ってしまった。

「やだ汚い！」

あたしの汁があ、蛭子ちゃんのおしっこと一緒にくたになっちゃった。

臭い！

汚い！

キモい！

ム力つくう！！」

ひとしきり蛭子の失禁を罵った後、彼女の顔を打ち据えるための態勢を作り、止めを刺す旨を告げる。

「こんなところに、こんなに臭いおしっこ垂れる女の子は、傍迷惑だし悪臭公害だから死ね」

と……。

後はもう、蛭子が跡形もなく潰れてしまうまで両手で顔を殴り続けるだけだった。

2006年、12月20日。

この日、矢沢蚩子という一人の少女が、生命体から、物体へと変わった。

続く

転（早百合の抱いた疑惑と決意）

また新たな犠牲者が出てしまった。矢沢蛭子（１７）。やはり、見る影もなく顔がひしゃげ、生前の面影を生命諸共一切がっさい奪われてしまっている。

着衣の腹部には茶色みがかった染みが広がり、遺体の腹部には広範囲に渡って青黒い鬱血が、あたし達をあざ笑うかのようにこれでもかと自己主張している。

尻周りに非常識な程の広さを誇る黄色い染みが広がっていることもまた、前の被害者と同じだ。身に付けていた下着が、鮮やかなツートンカラーに染めらあげられている。かつて、古代人が黄色染料として用いていたと言われている尿という体液を大量に吸い取っているのである。

それはそれは鮮やかに……、黄ばんでいた。

「マスコミには顔を殴られて死んだとしか言っていない……。なのにこんなに状況が似てるなんて……」

それは、紛れもなく同一犯による犯行であることを物語っている。……みんなの前で誓いを立てたにも関わらず、また犠牲者を出してしまったことに、負の思考という無間地獄から沸き上がる、悲しみ、怒り、脱力感、無力感といったマイナスの感情があたしという存在の全てを埋め尽していく。

知秋がやはり、怒りと憂いの入り混じった目付きで、肉塊と化したそれを見つめている。今回の事件の、前回の事件との最大の違いは、事件発覚後すぐに被害者の身元が割れたことである。前回奪

われていた被害者の手荷物が、今回は残されていたのだ。それは宛ら、日本警察への挑戦状であるかのようなのだ。そう、『捕まえられるものなら捕まえてみる』とでも云わんばかりの……。

あたしはこの被害者、矢沢螢子を知っている。昨年全日本空手選手権で手痛い敗戦を喫し、あたしの3連覇を阻んだ相手だ。それまではもはや、朝青龍状態だった。せいぜい千秋に負ける程度のものであったのだ。そこに現れた新星。その大会は、結局千秋にのされて準優勝に終わっているが、間違い無く螢子は、オリンピック級の空手家だった。

デーパーインパクト。それは、見るもの全てにとてつもない衝撃を与えるものになってほしいとの願いを込めて名付けられた、青鹿毛牡馬。その、ナリタブライアン以来の3冠馬が、あたしの脳裏を地響きと共に駆け抜けた。この前は聞き捨てしてしまったが、手掛りは、目の前に転がっていたのだ。

まさに、デーパーインパクトだった。ダイナマイトが爆発してもこれほどの衝撃にはならないだろう。

あたしの考えた通りなら、間違い無くこの矢沢蛍子は死なずにすんだ筈だ。ほんとに申し訳なく思う。

まだ物証はなかった。だが、犯人がほぼ確定している以上、無いならば、引っ張り出せば良いのである。

あたしは、蛍子を見たとき以上の負のエネルギーに存在の全てを蝕まれながらも、犯人【潰し魔】を追いつめるための算段を整える。

続く

転（知秋が巡らせる思考と策略）

あたしは考える。

なぜ早百合先輩が右手に包帯を巻いているのかを……。

あたしは考える。

なぜ蛭子さんが、なす術無く殺されてしまっているのかを……。

それは、蛭子さんの高い戦闘力を無効化する悪魔の魔法を戦闘開始前に発動したからだ。

問答無用で相手を萎縮させることができるもの……、警察手帳。

刑事の早百合先輩も、勿論持っている。

なにか、なにか先輩を潰し魔であると断定できる証拠はないだろうか、なにか……。

……、……、無い。

今、あたしも右手に包帯を巻いている。

先輩はあたしを疑っているのだろうか。

今あたしが先輩が潰し魔である証拠を探しているように。

なんとしても、証拠を見付け出さなくてはならない。

また潰し魔が出て来る前に。

先輩はなにやら深く考え込んでいる。
恐らくは、どうやってあたしを潰し魔に仕立て上げるかだろう。
あたしだって先輩を潰し魔にしようとしているのだ。
それは、仕方のないことなのかもしれない。

先輩は突然、蛭子さんの遺体の上から何かを手袋をしている左手で
拾いあげ、あたしに向かって今まで見せたことのない般若のような
笑顔で歩み寄って来る。

その様子は、宛ら追い詰めた獲物をいたぶるために近付いてくる殺
人鬼のようだ。

刑事は、犯罪者を社会的に抹殺する狩人とも言える。
あなたがち殺人鬼と言う表現も間違いではない気がする。

「知秋ちゃん……。」

これ、蛭子ちゃんのお腹の上にあったんだけど、なんだと思う？」

縮れた毛。

潰し魔の愛液によって大きな染みが広がっているお腹の上にあった
縮れ毛。

その問いに対する答えはもはや、1つしか無い。

「潰し魔の……、隠毛？」

位置からしても、形状から見ても、それしか無いようだ。

先輩は続ける。

「これで潰し魔も捕まるわね。

うちには、潰し魔の汁付きの被害者達の衣服もあるんだし、この毛と汁のDNAの型が一致すれば、決定打になる。

早速鑑識に回して来るわね」

先輩は、なんのつもりでいちいちそんなことをあたしに報告しに来たのだろうか。

まさか、本人特定の基本を知らない訳でもあるまいし。

ハツタリをかまして、被疑者の反応を窺うつもりだったのだろうか。その必要は無いと信じて、DNA鑑定の基本を先輩に説明する。

「もし一致しても、それは潰し魔のDNAサンプルが1つ増えるだけで、特定には到りませんよ？」

直に被疑者から抜いた訳じゃないんですから」と。

「あつ……」

見付けた。

見付けてしまった。

先輩を潰し魔にできる根拠を。

まだそこには無いが、羽沢先輩の力を借りれば引つ張り出すことが出来る。

あたしは早速、先輩へと電話をかけた。

続く

転（陰謀の健康診断）

あたしは今千秋と共に、とある総合病院の中にいる。

白い壁、白い天井、白い蛍光灯、白い服の職員。

なにからなにまで、白で埋め尽された空間は、清潔感よりもうすら寒さの方をより強く強調してくる。

昨日の夜、夏世に電話でお願いした。

「明日の健康診断で提出される、知秋ちゃんの検尿と検便と血液サンプルかすめ盗って来て、マル害の着衣のお腹の染みとDNA比べてほしいんだけど」と。

疑いを持ち始めた取っ掛かりは、二番目の被害者が矢沢蛍子だったことだった。

彼女は、オリンピック級の空手家だ。

その彼女がなす術無く叩き潰されている。

それは、最初の一撃を無警戒かつ無抵抗の状態で加えられたことを意味している。

どういう立場の人間なら、その状況に持ち込むことが出来るのか。可能性は、絶対的に信用でき、しかも、抵抗することが許されない相手だった場合のみであると言っている。

例え顔見知りだったとしても、夜に、人気の無い場所に連れ込まれたりしたら警戒しない筈がない。

それが可能な者。

それは、国内で唯一、仕事を妨害されると【現行犯で逮捕することが出来る】権限を持つ警察官ではないのだろうか。

余程根性の座った者でなければ警察手帳を提示されただけで萎縮してしまうだろう。

もし、仮に、【話を聞きたいだけ】と誘い出され、自分に何もやましいことが無かった場合、要求を断る必要があるだろうか。

無い。

そんな必要は、全く無いのだ。

蛭子が潰し魔、あるいは潰し魔グループである可能性は、その殺され方で即座に否定することができる。

やはり、可能性としては、相手が警察官だったということしか残らない。

警察官は、身を守る術としてなにか格闘技を身に付けることが暗黙のルールとして存在している。

したがって、今までの推論だけで知秋を潰し魔であると断定することとは、当然ながら出来ない。

だが。

彼女は、口を滑らせてしまった。

確かに、知秋は最初の事件の現場に入ったそばから……、……、こう言っていたのだ。

「狂ってる……」。

【女の子】なのに……。

こんなの酷すぎます！

何も出来ない【女の子】をこんなにになるまで【素手で】殴り続けるなんて……！」と。

最初のマル害は未だに身元すら判明していない。

しかも、その遺体はあたしが夏世に、

「こんな立派なおっぱい」

という言葉を使ってその主が女性であることを説明した程、女性としての体格が完成されていた。

にも拘らず、【女の子】である。

確実に大人の女性の体格で顔が判別できない遺体に対して、女の子という表現を使った理由は、その被害者が女の子（未成年）だったということから知っていたからではないだろうか。

更に言い訳のしようもないのは、【素手で】殴り続けたという言葉だ。

あの段階では、鑑識官からも、検死官からも、機捜隊からも、素手で殴り殺されたとの情報はもたらされてはいなかったのである。それはそうだろう。

あの言葉は、現場到着後にいの一番で遺体を確認に行った知秋が、

開口一番に発した言葉なのだから。

無論、その間に知秋に接触した、捜査官や検死官が誰一人居ないことは、ずっと側に張り付いていたあたしが証明できる。

知秋が潰し魔だ……。

残念ながらこれはもう、動かし難い事実であると言っていいレベルに到達している。

後は、物証だけ。

夏世には、DNAが一致したら、宇治課長に逮捕状の請求手続きを執ってもらうように指示してある。

全ては、この健診が終わってからだ……。

もはや、潰し魔は、先輩しか存在しない。
今から思えば、先輩は、否定しなかった。

あたしが何の気無しに言った、【女の子】や、【素手】に対して、
さも当たり前のようにそれを前提に話を進めている。

知っていたからではないだろうか。

怪しい点はまだある。

蛍子さんの時の、包帯だ。

蛍子さんの口の千切れ方は、間違い無く右の拳を叩き込まれたものだ。

傷口の範囲が右側の方が広く、短冊型に縦に、潰れたり残ったりしていた。

指が当たった部分の肉が潰れ、指の間の部分が助かったと考えるのが自然だろう。

そして、その拳を口の内部まで押し込むことによって、生えている歯を全てへし折った、そう考えて間違い無い。

だとすれば、絶対に右手の甲と指に蛍子さんの歯が食い込んでいる筈なのだ。

確実に、包帯クラスの怪我になる。

確かに、あの日はあたしも、右手の指と甲がえぐれていた。

肉が丸見えになっていて、血の代わりに黄色い汁が止めど無く出て来るほど、えぐれていた。

だが、それは、あたしの寝相が悪くて手をそこら中に打ち付けていたからに過ぎない。

その証拠に、部屋が血まみれになってしまっていた。

とにかく、寝て、起きたらそうになっていたのだ。

寝ているあたしに、蛍子さんを殺せる訳が無い。

今日は、健康診断だ。

当然、検尿、検便、血液検査がある。

これらを行うためには、サンプルが必要になる。

羽沢先輩に、これらのサンプルを警察で回収して別な検査に回して

もらうよう、電話で依頼しておいた。

身内から潰し魔が出てしまうのは残念だが、これ以上の犠牲者を出さないためにも、この騙し打ちは、必要悪なのである。

健診終了と同時に、潰し魔事件も終わる。

続く

転（間に挟まれた夏世が張った罫）

二人から全く同じ依頼を受け、今、それを皋月さんに丸投げしたところだ。

本来警察手帳を提示して捜査を行うことは、鑑識官の仕事ではない。

依頼の内容は、【健康診断に使われる三つのサンプルの回収】。

ことに、検尿、検便には、直筆サイン入りのラベルが貼ってある。

これらと、警察側で押収した三つの潰し魔サンプルのDNAの型が一致すれば、言い逃れ出来ない物証となるだろう。

時間的に、もう健康診断が始まっている頃だ。

病院長に、電話で血液サンプルを一番始めに採取してくれるよう、スケジュールを調整してもらってある。

事務所のデスクに足を投げ出し、椅子を後ろに傾けながら、くわえた煙草に火を灯す。

「皋月さん、余計なこと言わなきゃいいけど……」

皋月さんのお喋り癖を思いだし、苦笑いが自然と浮かんでくる。

彼女が事件関係者とよた話を繰り広げまくったために遅々として捜査が進まないという苦情が、何度かあたしに寄せられたことがあった。

「そんなこと、あたしに言ってもしょうがないのに……」

今回それをあたしが皋月さんに注意しなければならなくなるようなことは、御遠慮願いたいところだが……。

不安を覚え、煙草をくわえたまま携帯電話を手に取った。

送信先は、皋月さんだ。

アドレスのあ行を開き、【岩国皋月】を呼び出す。

送信ボタンを押すと、直ぐに待ちウタが聞こえてきた。

皋月さんの携帯電話が奏でるノイズの酷い軽快でありながら耳障りなヒップホップをBGMに、あたしなりに二人が言っていたことを整理してみることにした。

まず、二人の言うようにどちらかが潰し魔であると断定して良いのだろうか。

ここまで考えたとき、煙草の灰が、服の上に落ちてしまった。考え事をする、前後不覚になる癖があるとよく注意を受けるが、どうも治ってくれる気配は無いらしい。

煙草を灰皿で揉み消して、続きを考えようとしたところで、BGMがヒップホップから、

『留守番電話サービスセンターへお繋ぎします』との音声に変わる。

お節介ながら、一言注意しておくことにした。

「皋月さあん、病院内ではあ、電源切んなきゃ駄目なんですよお」この言葉が、皋月の留守番センターに登録された。

そんなことより、潰し魔である。

断定は……、おそらく出来るだろう。

あたしは、間違い無くあの時凶器は拳だとの見解は述べてはいない。明らかに【秘密の暴露】なのだ。

これを口にした荒居さんも、これを聞いて、あたしに確認してこなかった加藤先輩も、どちらも充分に疑わしい。

問題は、どちらが潰し魔なのかということなのである。
もはや、捜査はこのレベルにまで達していた。

自分の仲間を凶悪犯として検挙しなければならない……、この暗黒
宙域の中を宛てもなくさまざまい続けるのは相当に辛いがここから抜け
出すためにも全力を上げて犯人を挙げなければならない。

相手は、海千山千の叩き上げ警部補と入庁一発で捜査一課に配属さ
れた切れ者だ。

直球勝負では、いいように打ち返されるだろう。

この二人と対等に渡り合うには抜群のキレを誇る変化球、つまり、
罠が必要なのである。

そのためにあたしが用意した罠、それが、スケジュール変更であり、
皐月さんの投入なのだ。

皐月さんが、興奮気味に帰ってきた。

担当外の事件であるにも関わらず【犯人は、警察手帳を随時携帯し
ている警察官だ】【うちの管轄内に事件が集中しているから、警
視庁内の可能性が高い】などの考えを巡らせていただけに、どうに
も知的好奇心が押さえきれない様子だ。

鑑識課に入ってくるなり、

「夏世ちゃん、どっちな……」
など、様々なことを呟きながら、事務所内を所狭しと右往左往している。

「臯月さあん……、ちょっと落ち着いてください。」

うつとうしいですう……」

思わず口に出してしまった。

「科捜研から結果が来れば判るんですからあ、ジタバタしててもしょうがないですよ」

そう、否が応にも科学捜査研究所が【どちらかが潰し魔である】というDNA型鑑定の結果を持ってきてしまうのだ。

例えそれが、誰にも望まれていない結果であろうとも……。

初期の段階で荒居さんと加藤先輩が怪しいと睨んだあたしは、蛭子さん殺害事件の際に出てきた証拠のことを、一つ隠していたのである。

これが、あたしの決め球だ。

これから採取されるDNAの型が一致すれば、どのような知能犯でももう、黙るしか手はない。

状況的に、他人が偽装することは絶対に出来ないのだ。

ただ、解らないことがある。

二人揃って同じことを頼んできたこの状況だ。

何か、偽装工作でも施しているのだろうか。

思考の隙間に、

「もしかすると早百合か知秋ちゃん、分裂症かもしれないわね……。だとすれば、多分潰し魔は知秋ちゃんだと思うけど」

という言葉が滑り込んできた。

「分裂症って……、何ですかあ？」

あまり聞き馴染みの無い固有名詞に、思わず情けない質問が口を突く。

「精神分裂症。」

俗に言う多重人格だよ。

人格がスイッチしてる間、前まで出てた人格は総てが途絶えてしま
う。

つまり、【寝てるのと同じ状態】に陥っちゃうの」

「……、寝てる……」

確か依頼を受けたとき、荒居さんは寝て起きたら、右手の肉がえぐ
れていたと言っていた。

皐月さんの言う通り、荒居さんが怪しく思えてきた。

だが、まだ物証が出ていないのでは、動きの取りようもない。

全ては鑑定結果が出てからだ。

結（DNA型鑑定）

わたしは夏世ちゃんから命を受け、今、とある総合病院に居る。
目の前には、巷を恐怖のどん底に叩き落としてくれた【潰し魔事件】
の被疑者が二人。

そしてわたしのジャケットの内ポケットには、その片方の名がはつきりと明記されている【逮捕状】。

今の段階で、犯人は確定していた。

「ちょっと早百合、なんでそんな嫌そうな目で見るの、酷いなあ……」。

……、えーつとね……、夏世ちゃんに頼まれて、捜査に介入しちゃいました。
ごめんね」

傍目から見ていろいろと事件を邪推してきたが、実際にこうして捜査に介入し、さらに、邪推した通りの結果になってしまうと、なぜこうも上手く話題を切り出せないのだろう。

《こんなこと、いつたい早百合にどう説明しろってのよ……》

それは、歴然とした事実……。
そして、動かし難い……真実……。

逮捕状に書かれてある名前は、荒居知秋。

わたしは、これを早百合が居る前で告げ、尚且つ手錠までかけなければならぬのだ。

「お二人から頼まれてた、照合の結果が出ました。
じゃあね……知秋ちゃん、これ読み上げて」

知秋ちゃんが逮捕状を受取りにきた手に、手錠をかける作戦だ。
こんな騙し打ちはしたくなかったが、変に抵抗されるよりましである。

「えっ？

……、あ、はい……」

わたしの指示の意図を掴みかねているのだろうか、なにか、あからさまにうるたえているようだ。
それでいい。

そう簡単に見破られては困る。

知秋ちゃんが手を伸ばしてくる。
そして……、

ガシャン！！

彼女の手首に、手錠が填った。

これが、【潰し魔〃荒居知秋】という等式が、公の場で成立してしまつた瞬間となつた。

「あたしが……、潰し魔なんですか……？」

信じ難いといった表情で知秋ちゃんが問うてきた。

だが、その顔を真に受けるわけにはいかない。

「早百合、時間」

「18:38」

「18:38、荒居知秋さん、貴方を【商店街路地裏で発見された女性】及び、【矢沢蛭子さん】殺害容疑で逮捕します」

罪状をひとしきり述べたあと、ただただうるたえるだけの知秋ちゃんに向かい、

「大丈夫。」

絶対あなたを助けてあげるから。

助けてあげられるから」

と精一杯のフォローを入れる。

勿論言葉のあやとかではなく、うまくすれば、責任能力が無いと判断させることも出来るのだ。

「ごめん、話は署で聞くから」

今のところ出来ることは、連行することしかない。

「知りません！

あたしじゃないんです！」

喚きながら必死に抵抗する知秋ちゃんをパトカーまで引きずり込み、わたし達三人は、所轄署取り調べ室へと向かった。

「なんであたしなんですか……。

訳を聞かせてください……」

取り調べ室まで連行された知秋ちゃんは、納得がいかない様子をありありと表情に出しながら、まず、そう問うて来た。

「一致したの」

この一言しか返せなかった。

目の前には、被疑者としてではなく容疑者として、自分の後輩が座っている。

知秋ちゃんも、刑事として申し分のない洞察力を持っている。

おそらくはこれだけでも、事態を把握することは出来るだろう。

「早百合先輩もあたしと同じこと……、羽沢先輩に頼んでたんですか……。

それで、先輩のじゃなくあたしのと……、一致しちゃったんですね

……」

悲し気にうつ向きながら、ぽつりぽつりと言葉を繋いでいく。

「健診のサンプルは……、間違い無くあたしのなんですか……？」

サンプルがどこかで擦り変わったことを疑っているのだろうか。

うつ向いたまま、か細い声で抵抗を続けてくる。

「排泄物には、容器に直筆サイン入のラベルが貼ってある。

勿論筆跡鑑定もかけたわよ。

血液は今日医者が直に抜き取って、わたしが来るまで厳重に保管してもらってた。

……、悪いけど100%あなたのだよ」

知秋ちゃんを助けるためにまずしなければならないこと、それは、

彼女に現実を見据えてもらうこと。

ここで、自分が潰し魔としてここに存在している根拠だけは、受け入れてもらわなければならないのだ。

「どうせだから、決定打を出してあげようか？」

これで知秋ちゃんは……、少なくとも健診のサンプルは自分の物だと認めざるを得なくなる」

そう、いくらでも決定打を出せるのだ。

そのぐらい、捜査は終盤にさしかかっている。

「髪の毛一本貰っていい？」

語尾を上げて質問形は採ったが、有無を言わず一本抜き取る。

まずは、健診サンプルの本人証明。

じんわりと潰し魔Ⅱ荒居知秋が、法的に立証されていく。

「これと、健診サンプルでDNA比べてもらうから。」

これで一致したら文句は無いよね？」

「はい」

素直に認めてくれた。

これについては、どうやら決着しそうだ。

「あの、潰し魔のサンプルの方は間違い無く潰し魔のなんですか…

…？」

余程認めたくないのだろう。

まだ抵抗は続く。

「被害者達のどっちとも型が一致しなかったし、間違い無いんじゃない？」

死んでも、遺伝子は消滅しないから」

被害者の遺体から採取した毛髪とDNAの型を比較し、サンプルとは別人であるとの鑑定結果が既に出ていた。

「でも、誰かがあたしのをなすり付けたりとか置いたりとか出来るかも……」

今度は、何者かによって意図的に自分のサンプルを付着させられた可能性を挙げてきた。
本当にしぶとい。

だが、これも打ち砕くことが出来る。

「確かに潮とかアソコの毛ぐらいは、なんとかなるかもしれないわね」

ここまで言ったところで、ここぞとばかりに知秋ちゃんが仕掛けてきた。

「だったら！

あたしじゃないかも知れないじゃないですか！！」

彼女等にもたらされたサンプリング情報は、ここまでなのだからそうくるのも無理はない。

だが、わたしには夏世ちゃんが仕掛けた罠、もう一つのサンプリング情報があるのだ。

「あのね、あなた達を初期の頃から疑ってた夏世ちゃんが、もう一つサンプルあがってたこと……、隠してたのよ。

それはね……」

正直、言いたくない。

自分の後輩が、仲間が、猟奇殺人犯として刑事に追い詰められていく、そんな地獄画図を己自身の手で描きたくないのだ。

だが、彼女を不問にふすためには、どうしても一度追い詰めなければならぬ。

「矢沢蛍子さんの前歯に絡み付いてた【肉片】」
言ってしまった……。

もう後戻りは出来ない。

とことんまで追い詰めてしまうことにしよう。

わたしは、心を鬼にすることを誓った。

「それって……、蛍子さんの口かほっぺの肉なんじゃないんですか？」

知秋ちゃんが切り返してくる。

あれほど口がひしゃげていたのだから、当然の疑問だろう。

「そう。」

当然それもくっ付いてた。

でもね、蛍子さんとはDNAの型が一致しない肉も一緒にくっ付いてたのよ」

それを聞いた知秋ちゃんは、目を丸く見開いて、黙り込んでしまった。

もはや、状況も物証も知秋ちゃんが潰し魔であることを示している。あとは、決定打となるDNA型鑑定の結果を待つばかりである。

これが来れば、残る作業は彼女の前に証拠のデータを並べ、自分が潰し魔だったことの根拠を認めてもらうだけだった。

取り調べ室のドアがノックされ、わたしの夫である岩国洋樹刑事が中へと入ってきた。

そして、

「健診サンプルと、容疑者から採取した毛髪のDNAの型、ぴったり一致です……」

とのデータをもたらすと共に、その鑑定報告書を手渡してくれた。

「知秋ちゃん……」

話掛けながら、証拠となる鑑定報告書を並べていく。

「これがね」

七枚の報告書が机の上に並んだ。

「……、……、この件に関する全てのサンプルのデータ」

そこに記されている全てのDNAの型は、確かに一致していた。

「いやあああああ!!」

知秋ちゃんは、頭を抱え込んで激しく振りながら、悲鳴をあげている。

それは、彼女に逃げ道が無くなってしまった何よりの証拠だった。

結（計画準備）

知秋はいつまでも、知らぬ存ぜぬで通っていた。己が潰し魔であるということは、認めているというのである。

「早百合、精神分裂症って知ってる？」

「うちが開かない中、皐月が突然訊いてきた。名前や症状は知っていたが、正直メカニズムまではよく解っていないし、実際に患者を見たこともない。そしてなにより、この質問の意味が全く解らなかった。」

「で？」

「もはやあたしには、先を促すことしか出来ない。」

「ふう、知秋ちゃん、あんたがそんなだから分裂しちゃったんじゃないの!?」

《!》

あたしのせいで知秋が分裂した？

そんな筈はない。あたしは知秋に対して手下扱いしたことはないし、部下扱いもあまり無い。いつも妹のように接してきたつもりだ。たあしが原因で分裂するなど、有り得る筈が無いのだ。

「原因は極度のストレス。今のところ、それしか前例は無いの。どうにもならないレベルのストレスをかわすために別人格を引っ張り出して主人格は引っ込んだんじゃう訳」

……、ストレス……。本当にそうなのだろうか。少なくともあたしの前では人が変わったようには見えなかったのだが。

「主人格と別人格の区別がつかないことって、あるの？」

あたしには区別がつかなかった。あたしと接している間の知秋は

いつもと変わらない、よく知っている荒居知秋だったのだ。思い当たる節は、全く無い。

「普通とは逆のパターンかもしれないわね。主人格が受けたストレスを別人格が発散してたのかもしれない」

あたし達は、忘れてしまっていた。ここが取り調べ室というほの暗い非日常の空間における、仲間に対する取り調べであるという、有ってはならない状況だからなのだろうか、知秋の存在をすっかり忘れてしまっていたのだ。

「あたしは病気なんかじゃない、あたしは狂ってなんてない、あたしは潰し魔なんかじゃないいいい！」

知秋は黙って聞き続けてはくれなかった。耳を塞いで大きく頭を振りながら、必死に抵抗している。

「うーん、らちが開かないわね」

そんなことは言わなくても解っていることなのだが、ついつい口から出てしまう。全くどうすればいいというのだろう。このまま押し問答のみで留置期限を使い切る訳にもいかない。

「ポリグラフ、かけてみようか……」

皐月が秘密兵器の投入を提案する。だが、一つ問題があった。容疑者をポリグラフ（嘘発見器）にかけるには、容疑者自身からも承諾を得なければならないのだ。

今の知秋が受け入れるとはとても思えない。

「あたしは狂ってない……、あたしは狂ってない……」

案の定、耳を塞ぎながら虚な目で一点を見つめ、嚙のように繰り返している。

どうか落ち着いて考えてほしい。そしてポリグラフを受けてほしい。そう願いながら、切り出す。

「知秋ちゃん、受けてみる気、無い？」

それは、知秋にとってはある意味で究極の屈辱となるだろう。ポリグラフを受けるということは、自分が狂人であることを認めてしまうことに繋がるのだ。いい返事が来ることは、頭から期待してい

ない。

「嫌です、そんなもの絶対に受けません！」

やはりというか、案の定というか、ムキになって拒否してきた。
おそらくは物凄い……。

《！》

そうか、そういうつもりだったのか。ここには監視カメラがある。
そこに、豹変した知秋が映っていたならば、究極の物証になつてくれるのだ。

つまりポリグラフはただの餌でしかなく、この提案の真の目的は
ストレスを与えることによって潰し魔をカメラの前に引っ張り出す
ことではないのかと気付いたのだ。

目をかけている部下を騙すために地球上で一番嫌いな女に荷担する
のは癪だが、ここは知秋のためにも、皐月の策に乗った方が良さ
そうだと。

「ごめんね知秋ちゃん、あたしにも分裂してるようにしか思えない
よ」

そう発言すること、それは、あたし自身にとっても自分が分裂の
元凶だと認めたことになつてしまふのだが、この際は已むを得ない。
「違います、違います！」

誰かがみんなを騙すために、物証をでっち上げたんです！」

しまいには一時認めていた物証の信憑性に、再び難癖を付始める
有り様だ。ここまでくると本気で記憶に無いとは思えないのだが、
それを証明するにはポリグラフを受けてもらうしかないのが現状な
のである。

「そこまで嫌がるならしゃあないか。今日のところは引き下がるけ
ど、明日また来るからね。もう受けるしか手が無いんだから、一晚
頭冷やしてよく考えといて」

そう言い置いて目配せしてきた皐月に促され、取り調べ室をあと

にする。

取り調べ室とは違い、蛍光灯の光を燦々と浴びている所轄署の廊下はとても眩しく思えた。あたし達と別れて留置場に戻る知秋は、いったいどんな気持でこの眩しい廊下を歩いているのだろうか。

捜査は、皐月が正式にチームに加わりあたしとコンビで取り調べに臨むことになっている。とは言っても、物証は揃っているしその信憑性を知秋自身が既に認めているのだから、残る作業は知秋が精神分裂症であることを証明するのみののだが。

「で、次はどうすんの？」

作戦はもう読めていたのだが、首謀者が皐月である以上は彼女のペースに足並みを揃えなければならない。一々指示を仰ぐのも癪に障るが、作戦の指示を待つ。

「うーん、どちらの方が……、美人かなあ……」

突然の意味不明な言葉にめが極限まで開いてしまったのが、自分でも判った。おそらくは瞳孔も開いていることだろう。

「なにが、言いたい訳？」

訊き返すしか術は無かった。こんなときにどちらが美しいかなどというテーマで戦っても意味がない。

「ん？」

女のシリアルキラーが女を襲うときってのはね、九割六分が美人潰しなんだよ」

……、そうだったのか……。正直それは、知らない情報だった。美人。そう一言で言っても受け取り方は様々ある。知秋の顔立ちは紛れも無く美人だ。あたしが隣に居ても、ただの引き立て役程度にしかねないレベルで、際立って美しい。だが、あたしだってブスではないのだ。

美人のボーダーラインがどこを基準に引かれているかによって、自分に出る幕があるかどうかが決ってくる。

とは言っても、化け物であるかのように年齢を感じさせない皐月と比べると、やはり足元に平伏すしか無いのだが。

AB型の質問のしかたは二通りある。状況をそれなりに説明してから質問するタイプと、いきなり質問だけガツンと言ってくるタイプだ。ことに頭脳労働者は自分が常に二、三步先を読んだ思考を巡らせているがために他の人もそうなのだろうと説明を端折りがちになるらしい。皐月の場合は、典型的なそれである。

だから、いちいち訊き返さなければならぬのだ。

「あのさ、いつも先に説明してから訊けて言ってるでしょ！？美人って、誰と比べて誰がなのさ！？」

たぶん、【知秋に対して皐月が】なのだろうが。

「あ、ごめん。知秋ちゃんに対してわたしが」

やはりそうか。頭からあたしが出る幕は無いというわけだ。

「どっちもどっちなんじゃないの？」

大した差があるようには見えないけどね」

かなりの高レベルではあるが、差という概念においては、本当に全くと言っていいほど、無い。云わばクレオパトラと小野小町を比べて優劣を付ける様なものである。おいそれと返事を返すことなど出来なかった。

「まあなんであれ、あたしと比べりゃああなたの方が綺麗なんだから、困になるならあなただけしか居ないよ」

これが結論だった。

「じゃあ、わたし引き返すから。早百合はモニター観ててくれるかな。あ、録画もしといてね」

作戦会議終了。

残るは、首尾を待つだけとなった。

結（計画発動）

知秋ちゃんは、おそらくわたしの顔を見るなり潰し魔に豹変するだろう。あれだけあからさまなストレスを与えたのである。変わってもらわなければ、意味がない。

そんなことは無いと思うが、潰し魔が出てこなかったときのこととも考慮に入れて、保険をかけておくことにした。もしもの時に頼りになるのは、やはり保険の力なのである。

保険をかけるには、手続きが必要だ。その鍵を握る人物に携帯電話で連絡をとる。

「あつ、宇治くん？」

皐月だけどさあ……、……、申し訳ありません、宇治警視。荒居容疑者の取り調べにポリグラフを使用したいので、許可を頂きたいのですが」

それにしてもいちいち小煩い男だ。同期なのだから、呼び方などどうだっていいだろうに。運悪く身内から犯罪者が出てしまったために、降格させられた上に昇進のペースが少し遅くなったただで、本来ならばわたしとウジ虫野郎の立場は逆だったのである。

ポリグラフの使用許可も無事において、科学捜査研究所のスタッフと取り調べ室で合流することとなる。

取り調べ室前で待機すること20分、漸くポリグラフと科学捜査研究所のスタッフである、小宮山竜也がやってきた。

「お待たせしました。使い方はお解りですか？」

知っている。心電図のような電極と、脳波計の二方向からアプローチをかけ、脈動と脳波の乱れを感知するというものだった筈だ。だとすれば、それらと同じ位置に電極をセットすればよい筈である。それならば、問題無く解る。

それ以前に使うつもりが毛頭無い。ただ、その存在をほのめかすだけでよい。そうすることで知秋ちゃんの鬱積したストレスが爆発

することを期待してのポリグラフなのである。

「では僕は隣に待機してますね」

マジックミラーで隔離された隣室に小宮山がポリグラフ本体と共に隣室に移動していく。

続いてわたしが知秋ちゃんの待つ取り調べ室へと入っていく。天井には、違法取り調べや容疑者の逆ギレ対策のための監視カメラ。モニターの向こうでは、有事のために、早百合が待機している筈だ。対策は万全。後は、潰し魔をカメラの前に引っ張り出すだけだった。

「こんばんはー」

取り調べ室に入るなり、努めて陽気に声をかける。

「今度こそは、ポリグラフ受けてもらうからね」

若くして電撃的な恋愛結婚に踏み切り、とっとと芸能界を引退してしまった大女優であるとされている母親の血は、いったいどの程度発揮されたのだろう。もし狙い通りなら、今のわたしの顔付きはとんでもなく不快感を与える顔付きになっている筈だ。顔によるダメージを与えた後は、いよいよ真打ちポリグラフの登場である。隣室の小窓から小宮山によって電極と、脳波計が手渡される。

潰し魔出現へのカウントダウンは、既に【1】を数えていた。

残るカウントは、それらのセット。知秋ちゃんは、机を挟んだ向こう側で無言のまま打ち震えている。まるでこれから死を向かえようとしている者の断末魔のように、激しく、小刻に震えている。そして、その瞳は、もはやわたしが知る【荒居知秋】のものとは、全く異質のものとなっていた。

《来る！》

そう直感した。間違い無く、荒居知秋は別な誰か、否、何かに豹変する兆候を見せている。

「ふっ……、ふふふ、ふははは、あははははあ！」

突然の高笑い。それは、荒居知秋という名の肉の器に悪魔が収まった瞬間だった。

「あははははっ！ なぁにい、知秋ちゃん、捕まっちゃったのお。ほんとトロいわねえ」

潰し魔は、逮捕されてしまった知秋ちゃんをまるで夏世ちゃんのような間延び調でゲラゲラと嘲り笑う。

「えっとお、岩国イ、皐月警部でしたよねえ。自供しますから、ここ座ってくださいあい」

明らかに食らわす気だ。わたしが席についた瞬間に、潰し魔からの拳が飛んで来るのだらう。監守室には、今だれがいるのだらうか。監守、早百合、それ以外に、誰が存在してくれれば心強いのだが。

動く。今動きをとらないと、出てきてもらった意味がない。そして、喰らう。わざと攻撃をもらわないと、知秋ちゃんが豹変した証明にならない。今の高笑いが録音出来ていたなら良いが、監視カメラには音声を拾う機能が無いのだ。

一応この場には記録官がいて、隣室には、小宮山もいる。証人は多いが、万全を期すなら、やはり喰らっておくのが一番確実だ。モロに喰らわず、だがかわしきらず。簡単なようでなかなか絶妙なタイミングが必要とされる妙技だ。

失敗は許されない。空手のメダリストを叩きのめした使い手を叩きのめした化け物だ。直撃は卒倒に直結してしまう。そしてそれは、顔の形を叩き崩されることを意味しているのだ。

細心の注意を払い、対決の席へと向かう。そして……、パイプ椅子に尻が触れた瞬間、とれは飛んで来た。

シュツ！

風を切って高速で迫る拳はすぐ側まで迫っている。

《二本かなあ、三本かなあ……》

いったい何本の歯が失われるのだろう。いよいよわたしも部分入れ歯か。そんなことを考えながら避けの体勢に入る。

身を引いて避けるわたしの顎を拳が捉える。

ガタガタン！

殴り倒されたわたしの顎は、割れてしまっていた。有事を察した小宮山や記録官が駆け付けてくる。

顎から込みあげる熱い激痛に情け無くも涙を流してのたうつわたしをこの場から回収してくれた。

続いて早百合、監守に、ウジ虫野郎と夏世ちゃんまで加えた監守室軍団が駆け付けてくる。

《早百合……、よりによってウジ虫野郎まで呼んでくれたか……》

容疑者の許可無くポリグラフを持ち出し、しかも容疑者に殴り倒されて労災扱いだ。状況によっては懲戒免職さえも覚悟しなければならない。

回収されたわたしを素通りして早百合と宇治警視が取り調べ室へと突入、残った四人が介抱してくれる。

「顎、真つ二つですねえ。でもよかったあ。こういう折れ方は、綺麗に元に戻りますよお」

情け容赦無くへし折れた顎をいじり回す夏世ちゃんが、顔の形が変わる可能性は薄いと教えてくれる。

「よかったあ！」

小宮山も監守も、どちらも我が事のように夏世ちゃんの報告を、取り合った手を振り回して喜んでいる。

「あなたってほんとにファンが多いですね、羨ましい……」

それを見た記録官がしきりに羨んでいる。個人的には、そんなに羨ましいなら分けてやろうかと言いたくなる。こういう追っかけ連中は、鬱陶しくて仕方が無いのだ。

取り調べ室前では、いつもと変わらない日常的なやりとりが、繰り広げられていた。

かく言うわたしは、あまりの痛みにもう視界が霞み、意識も朦朧としてしまっていた。そして、その意識が潰えてしまうまで、然程の時間は必要としなかったのである。

解決

わたしが意識を取り戻したとき、その脇には洋樹がいた。

「臯月さん、終わったよ……」

彼は、事件が決着したことを告げる。

彼の報告によると、捜査は洋樹とその部下に当たる高橋刑事に引き継がれて行われたらしい。つまり、単独行動で大怪我を賜ったわたしと、潰し魔誕生の取っ掛かりとなってしまったと目されている早百合は、わたしの意識が飛んだ時点で捜査から外されてしまったことになる。どうやら早百合に対する除外の建前は、わたしに協力したことに對する連帯責任ということになっているようだ。

「……、……、……」

そこまで報告してくれたあと押し黙られてしまった。我が夫ながら、どうしてもこの独特のもどかしさが癪に障って仕方がない。

「一緒になるときさあ、どんな事でも隠さずに打ち明けることって約束せんかったっけ!？」

わたしだって事件を掻き回した者としての責任を感じているし、自分が携わった事件の結末は気になっているのだ。

「立証出来た訳？ 知秋ちゃんの分裂症」

あれだけ証拠が揃っているのだ。出来ない筈は無いのだが。そんな筈は無いのだが、なぜだか嫌な予感が胸の奥に大きく蟠っていた。決してゼロという訳ではないのだ。知秋がもう、この世には亡いという可能性は。その最悪な結末を迎えている可能性を完全に打ち消すためにも、早く洋樹の口から、二の句を継いでもらいたい、早く。

「あんたが捜査引き継いだんでしょ!？ 早く教えなさいよ!」

自然と言葉も荒くなってくる。洋樹が黙るとき。それは、都合が悪いことを言いあぐねているときなのだ。ただし、自分にとってではなく、相手にとって。

「……、……、……」

恐ろしく永い沈黙だ。どうやらこの事件が迎えた結末は、とんでもなくショッキングなものであるらしい。

わたしにとって……。

「……、俺は……、ずっと主張してたんだ。ずっと……」

突然始まった脈絡の無い話。わたしを傷つけないように、じつくりと言葉を選んだ上で選択されたストーリーなのだろうか。残念ながら、今の所は潰し魔事件との繋がりが何も見えて来ない。

「皐月さんも知ってるだろ、俺が前から留置所の寝具と便所は敷布団と和式にしろって主張してたの……。解ってたからなんだ。いずれこういうことが起こり得るって！ 解ってたからなんだよ！」

漸く話が読めてきた。やはり、知秋ちゃんは今も、この世に生きていないらしい。トイレなら便器と蓋の繋ぎ目に、ベッドなら手摺りに、自分の着ている衣服を結んで輪を作り、そこに頭を通して……絞首。彼女は、おそらくそれを行ったのだろう。

そうになると、必然的に一つの疑問が立ち上がる。【なぜ知秋ちゃんはそんなことをやったのか】という、あまりにも妥当な疑問が。

それは、最悪な結末へと導く道標なのだろうか。それとも、彼女が最期の最期に見せた正義と勇気と、意地の証なのだろうか。出来れば後者であってほしい。あつてほしいと願ってはいるのだが、おそらく九割方前者であろうことも、残念ながら予測は付いていた。

「早百合は……、生きてるの？」

これがこの事件における最悪の結末。【潰し魔出現の元凶が自分であることにショックを受けた早百合が自殺し、それに責任を感じた知秋ちゃんまで自殺】という、全くもって救い様の無い可能性を、わたしはついに、声に出して問うてしまった。どうしても問わずに

はいられなかったのだ。

白という色は、気持ちを落ち着けてくれる効果があった筈だ。それなのに、純白寝に色彩が統一されている病室という空間に打ち捨てられているわたしは、どうしてもその色から薄ら寒さしか感じ取ることが出来ない。

「答えてくれる？ さ・ゆ・り・は！？」

最近病院でも取り入れられ始めたという、場違いな程にフカフカな低反発マットレスを尻に敷きながら、洋樹の目を瞬きもせず見詰める。早く答えが欲しい。早く早く。

雲一つ無い空から降り注ぐ六角型の可視光線ですら、わたしを蒸し殺すために放たれた熱線であるかのように思えてならない。どうかしている。自分でもはつきり判るほど、今のわたしには冷静な思考、判断力が欠落していた。

「加藤は……、死んだよ」

……、……、……。

予想はしていた。そうなっていることは、予測できていたのに、あまりのことに言葉を失ってしまった。そして、今まで生きてきた中で一番とっていいほど、思考が混乱してしまう。

明らかに、わたしのせいなのだ。

あの時の一言。【あんたがそんなだから、知秋ちゃんが分裂しちゃったんじゃないの？】

この言葉で早百合が【自分のせいなのだ】という可能性に行き着いたのは火を見るより明らかなのである。取り返しのつかない失態後悔先に立たずとはよく云ったものだが、今回の後悔は、役にも立ってくれなそうだ。いくらここで後悔したところで、早百合や知秋

ちゃんが還ってくる訳ではないのだから。

荒居知秋容疑者の起訴状を検察庁へと送付し、結局事件は「容疑者死亡による書類送検」という極めて曖昧な解決を迎えることになった。

洋樹から聞いた経過報告によると、わたしが意識を飛ばしたあと、その時の映像を根拠に知秋ちゃんに対して本格的なポリグラフ検査を実施。それにもなつて潰し魔誕生の原因は仕事上のストレスであるということが確定したらしい。

ここまではあの時わたしが実行した作戦の通りに事が運んでいる。何の問題も無い。

「なんでこの検査結果が早百合の知るところになつちやつた訳？」
早百合も自宅謹慎にでもなつていたに違い無いのだから、誰か教えない限り、知る術が無いような気がするのだが。

「人の口を完全に塞ぐには殺すしか無いんだぞ？ 検査結果知つてる連中、片っ端から殺して回れつてのかよ」

どういう事なのだろうか。違法取り調べを行った悪徳刑事に加担した刑事が、嚴重注意だけで済んだとでもいうのだろうか。そんな事は絶対に有り得ない。有り得ない筈だ。その疑問を口に出して聞いてみる。

それに対する解答は、

「違法扱いになつてないんだよ、皐月さんのポリグラフ持ち出しは持つてっただけで使つた訳じゃないからつて」

というものだった。昔から身内のミスには甘いと思っていたが、まさかわたしの暴走に対し、ここまで寛大な処置が施されているとは。

「あのウジ虫野郎、要らんとところでわたしの人權なんぞ尊重せんでもいいつの……」

わたしに違法性がないと判断されたがために、早百合が出勤してしまったのである。あの早百合の事だ、関係者から捜査の経過を聞いて回る事は想像に難くない。

よしんばそれで皆が黙っていたとしても、捜査資料の閲覧という手が有る。彼女が謹慎になっていなかった以上、遅かれ早かれ知れることにはなっていただろう。

今、私たち夫婦は、早百合と知秋ちゃんの墓参りに来ている。二人の墓が同じ墓地に有ったのは意外だったが、どうやらどちらも江戸っ子だったらしい。わたしは早百合の、洋樹は知秋ちゃんの、それぞれの墓標を二手に分かれて掃除に入る。

「早百合……、ごめんね。本当に、ただ、ごめんなさい……」

気づいたときには、わたしは只々平謝りに謝っていた。

はじめは、取っ掛かりを作ったのはわたしだが、早百合が死んだのは早百合自身が弱かったからだと思っていた。だが、自分が同じ立場に立つたらどうしていたか、それを考えてみた結果、おそらくわたしも死ぬだろうという結論に至ってしまったのだ。

それほど自分が放ったあの一言が持つ意味は大きかったのだという事を知り、それに気付いた後からはもう、謝ることしか出来なく

なつてしまったのである。

「ごめんね早百合。わたし、絶対に逃げないから。ずっと、背負つてくからね、あんた達を……、……、……、殺しちゃったこと」

わたしは逃げない。そのためには、まずは認めなければ。二人の死は殺人であり、その犯人はわたしなのだということを。

「わたし、警察辞めることにしたから。勿論逃げるためじゃなくて、償うために」

身の振り方はもう決めてある。妹が開業し、今や全国展開するまでに至った調査会社。警察と同じ捜査権、犯人逮捕権を与えられている【警視庁公式依頼調査機関】全日本ディテクティブカンパニーへの入社。

前々からスカウトを受けていたことも有り、すんなり入社できることだろう。わたし自身何度か世話になったことも有り、面識という点でも問題はない。後は、宇治警視に辞表を提出するだけだ。

「ごめんね」

最後に墓標の前にひざまづき、深々と頭を下げてその場を辞す。

知秋ちゃんへのお参りを済ませた洋樹と入れ代わり、彼女の墓標の前でも同じことを繰り返す。こうしてわたしの、贖罪の一日は暮れていった。

空の色が、深い青から薄い青に変わって、出勤したわたしは計画

を実行に移す。犯した罪を償うために。

結

解決（後書き）

今回で完結でございますo(^ - ^)o

今までタイムリーにお付き合い頂いた皆様、ありがとうございました。そして、ごめんなさいm(_ _)m

何度もレッドゾーンに入ってしまいましたね。申し訳ないです。最後の最後でレッド三桁……、言い訳も出来ませんm(_ _)m

ではではまた次回作でお会い致しましょう……、っておまえ、あと四本も連載残ってんじゃねーか（セルフ突っ込み）！
ってな訳で、暫く新作は出せません

(TOT)(TOT)(TOT)

何卒ご容赦くださいませm(_ _)m

ではでは、重ね重ねありがとうございます(^o^)ノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1933b/>

潰し魔

2010年10月14日22時53分発行